

認知言語学や関連性理論は文学の認知研究に貢献できるか？

内海 彰

utsumi@se.uec.ac.jp

電気通信大学 電気通信学部 システム工学科

文学を人間の認知的側面からアプローチする研究（以降、文学の認知研究）は近年になって多く行われるようになってきた。たとえば、文学と認知に関する代表的なウェブサイトである“Literature, Cognition & the Brain”⁽¹⁾を見ると、英文学者であるターナーの一連の仕事や言語学者レイコフなどのメタファー論をはじめとした認知言語学的な研究、文学の心理研究（たとえば、ミオールとクイケンの実験的研究 (Miall & Kuiken, 1999)⁽²⁾）や 認知詩学 (Tsur, 1992)⁽³⁾などさまざまな情報が掲載されている。

また、本小論が掲載されているテクニカルレポートの発端となったワークショップ「認知システムとしての文学－文学の側から－」では、文学の認知研究を進めている日本で数少ない⁽⁴⁾文学者である、西田谷洋氏と中村三春氏の講演が行われた。特に西田谷氏は、文学プロパーの立場から、認知的視点による文学研究を精力的に行っている第一人者である。同氏の著書である「語り・寓意・イデオロギー」(西田谷, 2000) は スペルベルとウィルソンの関連性理論 (Sperber & Wilson, 1995) を基盤としており、また同氏が現在構想中の「認知物語論」ではラネカーらの認知文法 (Langacker, 1987) を道具として文学論を展開している。

しかしながら、これらの文学の認知研究に私自身が物足りなさを感じているのも事実である。本小論では、これらの研究、特に現在の主流である認知言語学や関連性理論を基盤とした文学の認知研究を批判的に検討しながら、どこに物足りなさを感じているのかを超私的観点から論じるとともに、私自身のめざす（めざそうとしている）文学の認知研究を提示することを試みる。

1 認知言語学と文学

認知言語学の基本的な考え方は、言語の構造や解釈を他の一般的な認知能力（例えば、知覚、カテゴリー化、記憶など）によって動機づけられるとする点にある。つまり、生成文法が主張するような自律した言語能力を想定せずに、一般的な認知能力で言語の諸現象をできる限り説明しようとするアプローチである⁽⁵⁾。この言語への認知言語学的アプローチは、さらに以下の二つのアプローチに分類できる。

- 身体的経験を通じた環境との相互作用から得られる抽象的な知識構造—e.g., レイコフの概念メタファー (Lakoff & Johnson, 1980) やジョンソンのイメージ・スキーマ (Johnson, 1987)—を想定し、それらの構造が言語現象に反映されるとするアプローチ
- 慣習化、抽象化、カテゴリー化などの一般的な認知能力を通じて、言語使用に関する具体的な事例から抽象的な知識構造—e.g., ラネカーのスキーマ (Langacker, 1987)—が抽出・拡張されるというふうに言語現象を説明するアプローチ

前者のアプローチは抽象的な知識構造そのもの（と言語表現との関係）に大きな関心を寄せるのに対して、

⁽¹⁾<http://www2.bc.edu/~richard/lcb/home.html>

⁽²⁾<http://www.ualberta.ca/~dmiall/reading/index.htm>

⁽³⁾<http://www.tau.ac.il/~tsurxx/>

⁽⁴⁾日本では、文学を認知科学の視点からアプローチする研究はほとんど行われていない。まず、文学の側から認知的視点を導入する文学者がほとんどいない。たとえば彼らによると、彼らが所属している日本近代文学会 1200 名あまりの中で、認知的視点から文学をとらえる研究者は彼ら 2 人だけだそうである。もちろん日本近代文学会会員だけが文学研究者ではないだろうが、もっと認知科学に目を向ける文学者がいてもよさそうである。一方、認知科学・認知心理学の側から文学にアプローチする研究者の数も、海外に比べて日本は少ない。この点においても、文学の範囲を拡張し、文学理論を援用しつつモデル論的／構成的に文学にアプローチした「文学と認知・コンピュータ (LCC)」研究分科会の研究活動 (小方, 内海, 森田, & 湯沼, 2001) は、まさに刺激に満ちた特筆すべき文学の認知研究であると言ってよい。

⁽⁵⁾認知言語学全般については、大堀 (2002), Ungerer & Schmid (1996) などを参照のこと。また、認知言語学の立場からの認知言語学と生成文法の違いについては、たとえば横山 (1997) を参照のこと。逆に、生成文法の立場から認知言語学と生成文法の違いについて論じたものとしては、大津 (2001) を参照のこと。

後者のアプローチは知識構造の獲得や利用という認知過程に重点を置くという違いがあると言える。

認知言語学による文学研究は、主に前者のアプローチによって行われている。特に、レイコフとターナーの概念メタファーによる詩的言語の分析 (Lakoff & Turner, 1989) や、ターナーのイメージスキーマや混合スペースによる分析 (Fauconnier & Turner, 2002; Turner, 1996) などが挙げられる。後者のラネカーの認知文法・使用依拠モデル (usage-based model) のアプローチでの文学研究は私の知る限り皆無であり、西田谷の研究 (e.g., 西田谷, 2001a, 2002) があるだけだと思われる。そこで以下では、レイコフやターナーの文学へのアプローチについて批判的検討を加える。なお、ラネカーの認知文法や使用依拠モデルが、どこまで文学テキストや文学を説明できるのか、どのくらい文学の認知研究に寄与できるのかなどについて、私は現時点で論じることができない。西田谷氏の研究 (や他の研究) の進展に期待しつつ、別の機会に改めて論じたい。ただし、以下の批判のうちのいくつかはラネカーらの研究にも当てはまると思う。

認知言語学による文学研究では、基本的に以下の (1) が主張・例証される。この背景には、伝統的な言語観 (2) が存在し、認知言語学はこのような言語観を暗黙のうちに否定していることになる。そして (1) の主張が極端な形で現れると、以下の (3) が主張される (ように見える) ことになる。

- (1) 概念メタファーやイメージスキーマは人間の認知過程の基盤となる知識構造なので、これらから具現化された言語表現は日常言語にも詩的 (文学的) 言語にも等しく観察される。
- (2) 日常言語と詩的言語は異なるものであり、詩的言語は言語研究の対象ではない。
- (3) すべての詩的言語、文学 (性) は、このような身体的経験に基づく知識構造によって説明される。

仮説 (1) 自体は確かに当を得ているし、この仮説を主張・実証することは認知言語学を支持するための有力な証拠にはなると思う。しかし、詩的言語や文学の研究としては、これではいかにも物足りない。最も物足りない点は、詩的效果や文学性の話を全くしない、または身体的経験に基づく知識構造によってこれらの概念を説明できそうにないという点である。つまり、文学に使われる詩的言語を説明することと、詩的言語を用いた文学を説明することは本質的に異なるということである。もちろん詩的效果や文学性といった非常に抽象的で主観的な概念を研究対象とすべきではないという意見もあろう。しかし私はこの問題を考えなければ「文学の認知科学」ではないと考える。概念メタファーに対する同様の批判は、他の研究者によっても行われている。たとえば Tsur (1999) は、概念メタファーによる比喩表現 (言語としての比喩) の理解は理解過程の早い段階の説明だけであり、詩的比喩の理解に重要な文学的反応 (literary response) の鑑賞 (appreciation) 過程は全く考えられていないと指摘している。また Berntsen (1999) は、レイコフの概念メタファー論では身体的経験が詩・詩的比喩の形式的側面 (音韻や表記) やその相貌的理解 (physiognomic apprehension) に影響を与えることを説明できないと批判している。

さらに伝統的な言語観である (2) についても、全面的に否定すべきではないと思う。後半部分の「詩的言語は言語研究の対象ではない」という部分は否定されるべきであるが、前半部分の「日常言語と詩的言語は異なるものである」という主張は、あながち間違いではない。もちろん日常言語と詩的言語に明確な境界線を引くことは無理である。普通のことばで小説や詩は構成できるし、日常会話の中に洒落た修辞・言い回しを使うこともできる。レイコフやターナーは日常言語と詩的言語の間のこのような共通性に着目して、それを外界との身体的経験を通じて得られる認知能力にグラウンディングさせるというアプローチを採用する。しかし、文学を文学たらしめる文学性や詩的效果の本質を解明するためには、逆に、日常言語と詩的言語の間の特徴的な違い・相違点がどのような認知能力・過程にどのようにグラウンディングされるかを問わなければいけない。そして、この相違点は修辞に典型的に現れることになる。

ここで一つ注意しておきたいのは、上記の主張が、ロシア・フォルマリズム以降の構造主義詩学における詩的言語の扱い、つまり言語の意味を取捨して表現形式を重視する態度 (e.g., Shklovsky, 1965) に戻れと言っているわけではないということである。構造主義が徹底的な客観主義を採用し、日常言語と詩的言語の表層上の違いのみに着目したことは、文学研究の進展に大きな貢献をしたが、文学性や詩的效果を扱う上では不十分でもあった (内海, 2001a)。文学の認知科学が扱うべき問いは、日常言語と詩的言語の表層上の違いによって言語解釈の認知過程にどのような違いが生じ、それらの違いがどのように詩的效果を喚起する

のか、もしくは、詩的效果を喚起する認知過程と喚起しない認知過程の差がどのようなものであり、その差がどのように表層上の違いとして具現化されるのか、といった問いである。

もっともレイコフ自身の興味は詩的效果や文学にはないと思われるので、上記の批判は実外的外れかもしれない⁽⁶⁾。しかしターナー (Turner, 1996) は物語や寓喩 (parable) などといった文学理論・修辞学の用語で一般的な認知能力を語り、その総体を「文学的な心 (literary mind)」と呼ぶなど、仮説 (1) より強い仮説 (3) をも主張しているように見受けられる点で、この批判は当てはまると思う。

概念メタファーの心理学的実在性に関しては、賛否両方からさまざまな論考 (e.g., Gibbs, 1994; Murphy, 1996, 1997; Katz, Cacciari, Gibbs, & Turner, 1998; Glucksberg, 2001) がなされている。実在性の問題そのものは文学の認知研究とは直接には関係ないと思われるので、ここでは詳しく論じない。しかし、概念メタファーを代表とする「身体的経験から得られる抽象的な知識構造」の問題点として、以下の2点は指摘しておきたい。

一つは社会的言語仮説 (Dunbar, 1996) との整合性の問題である。社会的言語仮説とは、社会的集団の規模の増加に伴い、それまで肉体的接触によって維持してきた集団内の個人間関係を効率よく維持するために言語が誕生したとする言語の起源に関する仮説である。この仮説自体を直接実証することは困難であるが、認知システムの進化における社会的知能の重要性 (Mithen, 1996)、他人の心を読むための心の理論モジュールの存在 (Baron-Cohen, 1995) やそれに基づくコミュニケーションの説明 (金沢, 1999; Sperber & Wilson, 1995) などの状況証拠の積み重ねによって、現在ではかなり妥当な仮説と考えられている (友永 & 松沢, 2001)。この仮説に従うとすると、初めは社会的関係の維持に用いられた言語が、次第に非社会的な事柄についての情報伝達にも用いられるようになったということになる。換言すると、一般的に言語の主機能として考えられている情報伝達は副次的産物ということである。これらの考え方は、明らかに、レイコフやターナーの主張する認知図式と矛盾する。つまり身体的経験を通じて獲得される物理的・具体的概念を比喩的に拡張・写像して精神的・抽象的な概念を理解するのではなく、「言語構造は社会的世界について話された時に生まれ、それが比喩によって拡充されたことで物理的な対象についても話されるようになった (Mithen, 1996, p.247)」のである。

もう一つの問題点としては、高次認知のすべての能力を身体的・感覚運動的経験に基づいて説明できるわけではない (身体的経験からのアングラウンディング) という指摘 (波多野, 2001) が挙げられる。たとえば、言語によって与えられる概念のすべてが身体的経験を基盤としているわけではない。他のことばによって定義される概念も存在する (*ibid.*, p.xiii)。よって、ことばを組み合わせることによって新たに類似性が創造されるような詩的比喩 (赤羽, 1998) までも概念メタファーで説明しようとするのは不可能であろう。

2 関連性理論と文学

スペルベルとウィルソンの関連性理論 (Sperber & Wilson, 1995) は、言語 (正確には意図明示推論的伝達) に関する認知理論である。この理論の骨格ともいえる原則が以下の2つの関連性に関する原則である。

関連性の認知原則 人間の認知は、最大の関連性を達成するよう仕向けられている。

関連性の伝達原則 すべての意図明示推論的伝達 (ostensive-inferential communication) 行為は、その行為自体の最適な関連性の見込みを伝達する。

- (1) 発話 (または他の意図明示的刺激) は、処理するに値するくらいの関連性を有する。
- (2) それは、発話者の能力と選好 (preferences) に整合性がある限りにおいて、最も関連性が高い。

関連性の認知原則は言語に限らない認知一般に関する原則である。たとえば、人間の知覚は関連性の高い刺激に注目するであろうし、記憶へのアクセス時には関連性の高い情報がより活性化させるであろう (Wilson, 2002)。この原則を (特に言語による) 意図明示推論的伝達行為に特化した原則が、関連性の伝達原則であ

⁽⁶⁾しかし比喩研究としてレイコフの概念メタファー論を見たとしても、同様の問題点を指摘できる。それは、概念メタファー論では、類似性創造に基づく詩的效果の喚起という比喩の本質を扱うことはできないという点である (Tsur, 1999; 内海, 2001b)。

る。この原則に従うと、話し手は伝達したい情報が聞き手にとって最適な関連性を達成するように仕向ける発話を選択するし、聞き手は最適な関連性を達成する解釈をその発話の解釈とする。

さらに最近の関連性理論では、関連性の原則に基づく言語解釈（語用論的推論）を行う能力は言語とは独立した心の理論（読心）モジュールの一部であるとするモジュール説を採用している（Sperber & Wilson, 2002）。このことは、関連性理論が、前述した社会的知能や心の理論に関する経験的知見（たとえば、ことばを獲得していない幼児に観察される推論的伝達行為や自閉症者のコミュニケーション障害など）と整合性があることを示している。

文学研究との関わりについては、関連性理論の創始者の一人であるスペルベルが文化人類学者の立場から修辞表現について活発に研究を行っていたこともあり（e.g., Sperber, 1975）、関連性理論の枠組みにおいて隠喩・アイロニーや詩的效果を扱っている。特に一般的な言語理解の枠組みの中で、「数多くの弱い推意群（a wide array of weak implicatures）を得ることによって関連性が達成されるような発話の持つ効果」として詩的效果を説明したのは画期的である（Pilkington, 2000; Sperber & Wilson, 1995）。この詩的效果論のさらなる発展が文学の認知科学に寄与するであろう。現在、私が考え始めている詩的效果の認知モデル（Utsumi, 2002）もこの詩的效果論が一つの基盤となっている。

しかし関連性理論による分析・モデル化だけでは、文学の認知科学としてはやはり物足りない。物足りなさの最も大きな要因は、関連性理論で扱われる認知能力は関連性の原則や語用論モジュールといった全体的な振る舞いの概略を規定する部分のみであり、「具体的な言語事象の細部の意味の復元のプロセスの明示的な規定はなされていない（西田谷, 2001b, p.37）」という点にある。この点に関しては、たとえば身体的経験に基づく概念間の写像や概念混合などの認知メカニズムによって比喻の意味解釈を説明する認知言語学に分があるように感じる。また、関連性理論は基本的に個々の発話の解釈の関連性を問題にしており、より大きな単位（たとえば、一つの詩全体や文学作品）での詩的效果や文学性の説明には適していないかもしれない。Blakemore (1992) はテキスト・作品全体で最適な関連性を有する場合もあると述べているが、テキスト全体の関連性と個々の文の関連性の関係をどのように考えるのか、そもそもテキスト全体の関連性はどのように規定できるのかなどには何もふれていない。

もう一つの大きな問題点としては、そもそも文学が関連性理論の対象としている意図明示推論的伝達なのかという点が挙げられる⁽⁷⁾。意図明示推論的伝達には、情報意図（聞き手に何かの情報を知らせること）と伝達意図（聞き手の情報意図を知らせること）の二種類の意図と、意図明示的刺激（伝達意図）の公然性（相互認知環境に含まれること）が必要である。しかし、詩や小説は情報意図を必ず明示しているであろうか。何かを伝えたいのはわかるが、何を伝えたいのかわからないというスタイルを敢えて採るような文章もあるのではないか。また暗示的技法によって伝達意図を隠しながら情報（意図）を伝えることもあるように思う（たとえば広告では伝達意図の公然性を満たさないように性的な事柄を暗示するという手法がよく用いられる（田中, 1995）。）このことは、関連性理論の問題点というだけではなく、文学によるコミュニケーションとは一体何かという重要な問題を投げ掛けている。意図明示推論的伝達でないものもコミュニケーションとして一緒に扱うことの可能性（金沢, 1999）とともに、今後の研究の重要課題となっていくであろう。

以上、文学の認知科学に対する関連性理論の可能性について論じたが、関連性理論は文学者である西田谷氏（西田谷, 2001b）からも批判を受けている。私自身は特に関連性理論の熱狂的な信望者ではないが、基本的な思想には共感する面も少なくない⁽⁸⁾。そこで以下では、西田谷氏の批判について批判的に論じ、関連性理論の正しい理解のための助けとする。なお、西田谷氏の批判は多くの部分において山梨正明氏による批判（山梨, 2000a）に基づいており、必ずしも文学研究における関連性理論の欠点を述べているわけではないことをあらかじめ断っておく。

「関連性理論は、認知科学第一世代の情報処理モデルに依拠している。情報処理モデルは、心のプロセスをコンピュータの情報処理プロセスと同一視し、そのプロセスは命題的な分節構造

⁽⁷⁾ もちろん、関連性理論の枠組みが意図明示推論的伝達以外の伝達行為に拡張できる可能性も同時に検討すべきではある。

⁽⁸⁾ 実際に、関連性理論に基づいた言語解釈の計算モデルを提案し、その中で比喻やアイロニーの解釈が実行できることを示してきた（内海 & 菅野, 1996; 内海, 2000）。

をもつ表象によって表示され，形式的な計算の過程として規定されるという表示主義・計算主義のパラダイムを構成する。」
(西田谷, 2001b, p.44)

「関連性理論には表示主義・計算主義に基づく欠陥がある。」
(*ibid.*, p.37)

すべての情報がきちんと分節された命題構造を持つわけではないし，すべての言語処理が抽象的な記号計算に基づくわけではないという点では，関連性理論が完全ではないことを示していると言える。しかし，これらを表示主義・計算主義という用語で認知言語学と対比させる(山梨, 2000a, 2000b)のは正確さに欠く。分節化された命題構造を持たない情報でも何らかの表象は持つはずである。たとえば，レイコフの概念メタファー，ジョンソンのイメージスキーマやラネカーのスキーマなどは命題構造は持たないであろうが，頭の中に表象されているはずである。また記号計算以外の処理も計算であり，脳が何らかの計算を行うという意味では(認知言語学が一つの理論的根拠としている)脳科学は明らかに計算主義である。また関連性理論は，外界との相互作用を無視して記号世界での計算だけに閉じているわけではないことを指摘しておく。

「第一に，文脈効果の認定の不充分さがある。文脈含意・強化・矛盾という文脈効果の区別は厳密を欠く。例えば，数え歌等の定型的反復類型テキストに見られる，意味が文脈と相互作用しない保留も効果としては考えられる。」
(西田谷, 2001b, p.37)

文脈効果が上記の3種類で良いのかどうか，他にも文脈効果として考えるべきものがあるのではないかという議論は関連性理論研究者の中でも行われている(e.g., 今井, 2001)。しかしこれが関連性理論の本質的な欠点ということにはならない。また「意味が文脈と相互作用しない保留」という箇所が何を意味するのかがよくわからないが，定型的反復による詩的效果については数多くの弱い推意群としての説明がなされている(e.g., Sperber & Wilson, 1995; Pilkington, 2000)。逆にこのような効果の議論は認知言語学では全く行われていない。

「コミュニケーション維持による伝達の無理解のため，理論的安定性を維持し，保留を排除している。」
(西田谷, 2001b, p.37)

「コミュニケーション維持による伝達の無理解」は何を意味するのか理解できない言説である。「保留を排除する」ということが，たとえば，一義化，照応解決，富化などを必ず行わなければ表意が決定できないというようなことを述べているのだとすると，これも誤解である。関連性理論ではこれらの処理が必ず行われなければいけないとは言っておらず，あくまでも聞き手にとって十分な関連性を達成できるだけの程度にまで処理を行えばよいと考える(Wilson, 2002, p.9)。

「また，これら文脈効果は，強い推意に限定されている。だが，日常言語では認知効果を考慮した場合，強い推意と弱い推意の違いは相対的だ。」
(西田谷, 2001b, p.37)

関連性理論では，文脈効果を強い推意に限定していない。強くても弱くても発話と文脈の相互作用によって得られる推意は文脈含意である。後半の「強い推意と弱い推意の違いは相対的だ」は自明であり，関連性理論はこれに反する主張を何ら行っていない。

「第二に，意味解釈プロセスの裏付けの欠落がある。語りテキストは，省略や曖昧性に満ちており，意味内容が表層レベルに十全に反映されている保証はない。関連性理論で用いる論理形式は，統語論レベルでのそれと語用論レベルでのそれが共存しており，しかも単層・復層のどちらに位置するのかも不明確だ。」
(*ibid.*, p.37)

まず，関連性理論は文や発話の表層レベルに十全に意味内容が反映されているとは主張していない。これは程度の問題であり，表層に意味が全く反映されていないわけでもないし(全く反映されていなければ，我々は何を手掛かりにことばの意味解釈を行えばよいのだろうか)，かといってコード解読のように意味が

導けるほど反映されているわけでもない。当然ながら、省略や曖昧性についても表意を導出する上で考慮している。

後半部分は意味不明である。「論理形式は、統語論レベルでのそれと語用論レベルでのそれが共存しており」のそれが何を表すのか明確でない。「それ＝論理形式」とするならば、語用論レベルでの論理形式とはいかなるものであろうか。さらに「単層・復層」が何を表しているのかわからない。何におけるどのような階層構造を想定しているのだろうか。

「語りテキストに見られる複合的な構文では、論理形式→表意→高次表意→推意といった関連性理論の想定する手順通りには予測できない場合がある。」 (ibid., p.37)

確かに、関連性理論ではこのような手順に沿って解釈が進行するように見受けられるが、必ずしもそのような主張はしていない。たとえばウィルソンは“These tasks (constructing explicatures, implicated premises and implicated conclusions) are not sequentially ordered, but performed in parallel, using the relevance-theoretic comprehension procedure (Wilson, 2002, p.7)”と述べている。しかしこの主張に関してはこれ以上の説明はなく、並行して処理されるといっても、それらがどのように並行しているのか、並列処理で関連性の算出が果たして可能なのかなどの問題点は依然として残るであろう。

「関連性理論では、意味の曖昧性と漠然性の位置づけは、表意レベルと推意レベルにおいて異なるが、語りテキストの表現には、一義化が不可能な漠然性で特徴づけられる表現が広範に存在する。」 (西田谷, 2001b, p.37)

前半部分は山梨氏の「表意の決定に際し、言語表現の曖昧性は一義化のプロセスによって解除することが可能であることを前提としている。この方向が正しいならば、RT(関連性理論)では、表意を決定する世界は、意味の漠然性の問題からは独立していることになる。これに対し(中略)推意にかかわる発話解釈のレベルでは、<ルース・トーク>、<解釈における類似性>(中略)などの問題からも明らかのように、発話解釈の漠然性が認められている(山梨, 2000a, p.13)」という批判を意図しているようであるが、この批判は以下の理由で不適切である。前述したように、表意の導出において必ずしも一義化(曖昧性解消)を行う必要はないし、一義化とは別に富化(enrichment)という(語意よりも狭くしたり、広くしたりする)処理によって漠然性にも対処している。なお、富化によって得られる情報(命題)は表意であり、それ以外の伝達情報が推意であることに注意する必要がある。

後半部分の「一義化が不可能な漠然性で特徴づけられる表現」という記述では、曖昧性(ambiguity)と漠然性(vagueness)の区別が正しくなされていない。一義化は曖昧性を除去する処理であり、漠然性とは関係ない。また、前述したように、関連性理論は曖昧性や漠然性を残したまま解釈を進めることを禁じていない。そのままで十分な関連性が達成できればそれでいいのである。

「第三に、関連性理論の論理構造は、言語的知識と百科事典的知識の二分法に見られる二値論理となっている。しかし、これは形式と意味の区分に代表されるモジュールの自律性を前提としており、語りテキストの表現はいずれか一方の機能を担うという風にカテゴリー化されることはない。」 (西田谷, 2001b, p.37)

まず初めに、二値論理という言い方はおかしい。二値論理とはものごとの真偽を真か偽かのどちらかにわけて考える論理のことであり、二分法とは意味が違う。そして関連性理論では二値論理の考え方は採用していない。また、関連性理論は形式と意味がそれぞれ自律したモジュールを構成するとは主張していない。前述したように、心の理論モジュールのサブモジュールとしての語用論的推論モジュールしか仮定していない。さらに「語りテキストの表現はいずれか一方の機能を担う」という部分は意味不明である。形式か意味かのいずれかしか持たない表現などあり得ないし、関連性理論が知識構造の二分法的区分をしていることをもって、そのようなカテゴリー化をしているという主張は、論理の大きな飛躍である。ただし、概念に関する二分法的な知識構造を仮定していること自体は、認知言語学のアプローチから見ると全く不十分であることは確かである。

3 私のめざす文学の認知科学へ

以上、二つの章にわたって、認知言語学と関連性理論を文学の認知科学研究という観点から批判的に論じた。これらのアプローチの物足りなさをまとめると、以下ようになる。

- 認知言語学はさまざまな認知機構からボトムアップ的に言語現象を説明するが、その対象範囲は日常言語に限られている。文学性や詩的效果という概念を対象外にただけでなく、本来そのような概念を扱うことが不可欠なメタファー・比喩研究や文学研究を物足りないものにしてしまった。しかし、これらの概念をうまく扱える可能性はあると思う（そうすると、もはや認知言語学とは言えないかもしれないが。）
- 関連性理論において扱われる認知機構は、関連性の認知原則という非常にマクロな規則のみであり、それ以上の詳細な認知機構の話は出てこない。よってこの枠組みの中だけでは、「数多くの弱い推意群としての詩的效果」以上の詳細な認知モデルを構築することはできそうにない。

では次に、私のめざそうとする文学の認知研究とはどのようなものなのであろうか。今までの批判的論考から察してもらえればありがたいが、一言で言うと、詩的效果／文学鑑賞 (literary appreciation) の認知科学ということになる。以下にその概要を示して、本小論の結びとしたい。もちろん以下の内容はまだ構想の段階であり、不十分・不明確な部分が多いことをあらかじめ断っておく。

まずは詩的（審美的）効果の定義であるが、これはなかなか難しい問題である。直観的には、感情、感覚、美的価値などに関連した、明示的に命題として表象することのできないような効果であることには異論はないであろう。より具体的には、文学作品やその中の文学表現（より広く言うと、芸術作品）のあり方を味わうように捉えたときに心の中に喚起される特別な心的状態・感情（たとえば、徃住 (2001) で分析されている審美的感情群）と、一応、定義することができる。ただし、詩的效果の具体的な内容については、美学における美的質／美的範疇論 (佐々木, 1995) などを参考にしつつ、考えていかなければいけない。

詩的效果を定義すれば、文学性は「詩的效果を喚起する文、文章、テキスト、作品が共通して持つ性質」と定義することができる。このような性質の一つとして（意図的な）ずれ (incongruity) とその解消を挙げることができる。たとえば、ロシア・フォルマリズムやブラハ言語学派が文学性の核心概念として提案した異化 (defamiliarization) という概念は、主に形式面に注目したずれとみなすことができるし、最近では文学性が異化とその再解釈として把握できることを実験的に検証した研究 (Miall & Kuiken, 1999) も行われている。

しかし、すべての「ずれ」が詩的效果を喚起するわけではない。そこに、ある形式的・意味的な「ずれ」とある詩的效果を結び付ける認知機構の存在が示唆される。では、果たして詩的效果の喚起に特化した認知機構（モジュール）があるのであろうか。現在のところこれについては否定的であり、詩的效果は一般的に用いられる認知機構（知覚、カテゴリー化、記憶、注意）がスムーズに作動しない、つまりこれらの認知機構の働きがじゃま・妨害されたときに喚起されるとする説が有力である。

以上の議論から、私のめざす文学の認知研究における解明すべき中心的課題は、「どのような認知機構・能力が、どのような表現（形式・意味）によって妨害されれば、どのような詩的效果が生じるか？」ということになる。現段階では、以下のような詩的效果の喚起過程の概要 (Utsumi, 2002) を提示しているところである。

1. 言語表現に内在するずれによって多大の処理労力（負荷）が生じる。
2. ずれを十分に解消することができるくらいの豊かな (rich) 解釈が生成される。
3. その解釈は、解釈の主体が何が起こったか判断できないほど、一瞬のうちに生じる。

より具体的に、どのような認知機構が詩的效果の喚起に関与するかは、言語芸術以外の諸芸術の認知的研究 (e.g., Solso, 1994) などを参考にしつつ解明していきたい。さらに、「ずれとその解決」という概念は、ユーモアを生じさせる表現に特徴的な性質 (Ziv, 1984) でもあるし、アイロニー（言語アイロニー、状況アイロニー—いずれも）とも密接な関係がある (Shelley, 2001; Utsumi, 2000)。よって、今までは別々に議論されてき

た文学理論・詩学とユーモア論，アイロニー論，メタファー論を認知の観点から統合した理論体系（内海，2002）を構築することも期待できよう。

参考文献

- 赤羽 研三 (1998). 言葉と意味を考える [I] 隠喩とイメージ. 夏目書房.
- Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. MIT Press. 長野 敬, 長畑 正道, 今野 義孝 (訳) (1997). 自閉症とマインド・ブライントネス, 青土社.
- Berntsen, D. (1999). How is modernist poetry “embodied”? *Metaphor and Symbol*, 14(2), 101–122.
- Blakemore, D. (1992). *Understanding Utterances*. Oxford: Basil Blackwell. 武内 道子, 山崎 英一 (訳) (1994). ひとは発話をどう理解するか — 関連性理論入門 —, ひつじ書房.
- Dunbar, R. (1996). *Grooming, Gossip and the Evolution of Language*. Faber & Faber. 松浦 俊輔, 服部 清美 (訳) (1998). ことばの起源：猿の毛づくろい、人のゴシップ, 青土社.
- Fauconnier, G. & Turner, M. (2002). *The Way We Think: Conceptual Blending and The Mind's Hidden Complexities*. Basic Books.
- Gibbs, R. (1994). *The Poetics of Mind*. Cambridge University Press.
- Glucksberg, S. (2001). *Understanding Figurative Language: From Metaphors to Idioms*. Oxford University Press.
- 波多野 誼余夫 (2001). コミュニケーションと思考への招待. 乾 敏郎, 安西 祐一郎 (編), コミュニケーションと思考, pp. v–xvi. 岩波書店.
- 今井 邦彦 (2001). 語用論への招待. 大修館書店.
- Johnson, M. (1987). *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. University of Chicago Press. 菅野 盾樹, 中村 雅之 (訳) (1991). 心の中の身体—想像力へのパラダイム変換—, 紀伊国屋書店.
- 金沢 創 (1999). 他者の心は存在するか. 金子書房.
- Katz, A., Cacciari, C., Gibbs, R., & Turner, M. (1998). *Figurative Language and Thought*. Oxford University Press.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. 渡辺 昇一, 楠瀬 淳三, 下谷 和幸 (訳) (1986). レトリックと人生, 大修館書店.
- Lakoff, G. & Turner, M. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. The University of Chicago Press. 大堀 俊夫 (訳) (1994). 詩と認知, 紀伊国屋書店.
- Langacker, R. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Miall, D. & Kuiken, D. (1999). What is literariness? Three components of literary reading. *Discourse Processes*, 28(2), 121–138.
- Mithen, S. (1996). *The Prehistory of the Mind: A Search for the Origins of Art, Religion and Science*. London: Thames and Hudson Ltd. 松浦 俊輔, 牧野 美佐緒 (訳) (1998). 心の先史時代, 青土社.
- Murphy, G. (1996). On metaphoric representation. *Cognition*, 60(3), 173–204.
- Murphy, G. (1997). Reasons to doubt the present evidence for metaphoric representation. *Cognition*, 62, 99–108.
- 西田谷 洋 (2000). 語り 寓意 イデオロギー. 翰林書房.
- 西田谷 洋 (2001a). パースペクティブと物語 —物語世界はいかに提示されるか—. 日本認知科学会「文学と認知・コンピュータ」研究分科会予稿集.
- 西田谷 洋 (2001b). 根元的虚構論と関連性理論. 金沢大学語学・文学研究, 29, 35–44.
- 西田谷 洋 (2002). 認知システムとしての文学 —視点の制御機構—. 日本認知科学会大会ワークショップ「認知システムとしての文学—文学の側から—」資料. (本テクニカルレポートにも掲載).
- 小方 孝, 内海 彰, 森田 均, 瀧沼 潤 (2001). 特集「文学と認知・コンピュータ」編集にあたって. 認知科学, 8(4), 307–310.
- 大堀 壽夫 (2002). 認知言語学. 東京大学出版会.
- 大津 由紀雄 (2001). 言語機能の性質と発達. 乾 敏郎, 安西 祐一郎 (編), 運動と言語, pp. 189–225. 岩波書店.
- Pilkington, A. (2000). *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*. John Benjamins Publishing Company.
- 佐々木 健一 (1995). 美学辞典. 東京大学出版会.
- Shelley, C. (2001). The bicoherence theory of situational irony. *Cognitive Science*, 25(5), 775–818.
- Shklovsky, V. (1965). Art as technique. In Lemon, L. & Reis, M. (Eds.), *Russian Formalist Criticism: Four Essays*, pp. 3–57. University of Nebraska Press. 水野 忠夫 (訳) (1971). 方法としての芸術, V. シクロフスキー (著). 散文の理論, せりか書房, pp.5–38.

- Solso, R. (1994). *Cognition and the Visual Arts*. MIT Press.
- Sperber, D. (1975). *Rethinking Symbolism*. Cambridge Univ. Press. 菅野 盾樹 (訳) (1979). 象徴表現とはなにか, 紀伊国屋書店.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*. Oxford, Basil Blackwell. 内田 聖二, 中達 俊明, 宋 南先, 田中 圭子 (訳) (2000). 関連性理論 — 伝達と認知 —, 研究社出版.
- Sperber, D. & Wilson, D. (2002). Pragmatics, modularity and mindreading. *Mind & Language*, 17(1/2), 3–23.
- 田中 圭子 (1995). 広告を読み解く. *言語*, 24(4), 48–55.
- 往住 彰文 (2001). 認知的感情の構造と文学テキスト理解. *認知科学*, 8(4), 369–375.
- 友永 雅己, 松沢 哲郎 (2001). 認知システムの進化. 乾 敏郎, 安西 祐一郎 (編), 認知発達と進化, pp. 1–36. 岩波書店.
- Tsur, R. (1992). *Toward A Theory of Cognitive Poetics*. Amsterdam: North Holland.
- Tsur, R. (1999). Lakoff's roads not taken. *Pragmatics & Cognition*, 7(2), 339–359.
- Turner, M. (1996). *The Literary Mind*. Oxford University Press.
- Ungerer, F. & Schmid, H. (1996). *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Addison Wesley. 池上 嘉彦 ほか (訳) (1998). 認知言語学入門, 大修館書店.
- Utsumi, A. (2000). Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony. *Journal of Pragmatics*, 32(12), 1777–1806.
- 内海 彰 (2000). アイロニー解釈の認知・計算モデル. *情報処理学会論文誌*, 41(9), 2498–2509.
- 内海 彰 (2001a). レトリックの認知・計算モデル: 隠喩とアイロニー. *認知科学*, 8(4), 352–359.
- 内海 彰 (2001b). 現代メタファ論における詩的比喩の扱いの批判的検討. 日本認知科学会「文学と認知・コンピュータ」研究分科会「第10回定例研究会 in 東京」発表資料集.
- Utsumi, A. (2002). Toward a cognitive model of poetic effects in figurative language. In *Proceedings of 2002 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*. WP1M2.
- 内海 彰 (2002). ユーモアの鑑賞過程の認知モデルに関する一考察. *人工知能学会第16回全国大会論文集*, pp. 1C1–08, 1–3.
- 内海 彰, 菅野 道夫 (1996). 関連性理論を用いた文脈の中の隠喩解釈の計算モデル. *情報処理学会論文誌*, 37(6), 1017–1029.
- Wilson, D. (2002). Relevance theory: From the basics to the cutting edge. ICU open lectures on cognitive pragmatics, International Christian University.
- 山梨 正明 (2000a). 関連性理論のアプローチの批判的検討. *英語青年*, 146(7), 11–14 (427–430).
- 山梨 正明 (2000b). 認知言語学原理. くろしお出版.
- 横山 真樹 (1997). 言語と認知. *物性研究*, 68(1), 18–38.
- Ziv, A. (1984). *Personality and Sense of Humor*. Springer Pub. Co. 高下 保幸 (訳) (1995). ユーモアの心理学, 大修館書店.